

国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語行動における“politeness”の日米比較：
談話レベルにおける“politeness”の普遍理論確立
への模索

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇佐美, まゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/3606

言語行動における“politeness”の日米比較：
談話レベルにおける“politeness”の普遍理論確立への模索

宇佐美まゆみ
昭和女子大学

1. はじめに

対人コミュニケーションの重要な一手段である「会話」の社会的相互作用性を考えると、“linguistic politeness”は、互いの人間関係を円滑に進めていくための、言語コミュニケーションにおける必要不可欠な要素であると言える。日本語においては、複雑な体系をもつ敬語が発達しているために、従来、敬語研究、或いは、敬意表現、丁寧表現の研究という形で、主に、言語形式とその相手、状況、場面に応じた言葉の使い分けに焦点をおいた研究が盛んで、膨大な研究結果、資料が蓄積されている。しかしながら、あまりにも豊富な言語の形式にとらわれすぎる余り、その言語形式として表れた敬語が、用い方によっては、相手を不愉快にさせることもあるというような、実際の言語使用における言語の機能面から、敬語やその他の言語行動をとらえようとした研究は、ほとんどなされてこなかったと言っても過言ではあるまい。

一方、欧米では、最も多くの研究がなされている印・欧言語に、日本語をはじめとする東南アジア諸言語にあるような、言語形式にはっきりと表れた敬語が存在しないことも関係しているのだろうが、言語形式に焦点を当て、その背後にある人間関係と politeness の関係を分析したのは、Brown and Gilman(1960)のヨーロッパ語における人称代名詞の研究 (tu と vous の使い分け等) が最初である。その後は、言語形式だけに限らず、より広い意味で言語行動における politeness をとらえた研究が、様々な角度からなされてきた。Lakoff(1973)、Leech(1983)等、linguistic politeness の理論的枠組みを提示しようとした研究もいくつかあるが、中でも、最も包括的なものとして、ここ数年来、言語学者のみならず、文化人類学、社会学、社会心理学等、関連諸領域の学者の興味をも喚起してきているものに、Brown and Levinson (1978, 1987)の“politeness theory”がある。この理論が、部分的に批判を受けながらも、様々な分野の研究者の注目を浴びている主な理由は、彼らの理論が“linguistic politeness”と銘うちながらも、言語形式だけにとらわれず、人間関係、社会的・心理的距離、相手にかける負担の度合い等、複雑に絡み合う諸要因を考慮に入れ、それらの相互作用の結果としての、言語行動における“politeness”をより包括的に取り扱っているからであると言える。

ただ、普遍的であるとして提唱された Brown and Levinson の理論は、(1)日本語等、語用論的に制約力さえもつ複雑な敬語体系を有する言語における言語使用をうまく説明しているとは言い難い。また、(2)最近とみに重要性が認識されている談話レベルにおい

て“politeness”をとらえるという視点に欠けているという二点において、再考、修正の余地が多分にあると思われる。本稿では、いくつかの先行研究の結果と初対面の二者間のケーススタディー的会話分析の日米比較の結果を踏まえて、言語行動における“politeness”の普遍的枠組みの探求・模索のための今後の方向性を示したいと思う。

2. Brown and Levinson の politeness theory の概略

Brown and Levinson の politeness theory では、「面目(face)」という概念を基本概念としている。すなわち、人間には、積極的面目(positive face)と消極的面目(negative face)という二種類の面目があるとされている。彼らの定義によると、積極的面目とは、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという積極的な欲求であり、消極的面目とは、賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという欲求のことである。politeness は、対話者のこの二種類の面目を保つための戦略として規定されるとした。例えば、「依頼」という行為を考えても分かるように、ある種の行為は、本質的に相手の「面目を脅かす行為(Face Threatening Acts)」であるととらえる。人に何かを依頼するという行為は、相手を賞賛するというような積極的面目をたてることではないし、むしろ、相手に時間や労力をかけさせることによって、相手の邪魔された区くないという消極的面目を脅かすことになるのである。linguistic politeness は、この「相手の面目を脅かす行為(FTA)」の度合いに応じて規定されるとする。具体的に数量化できるわけではないが、この相手の面目を脅かす度合いは、三つの要素によって規定されるとして、Brown and Levinson は、以下のように公式化している。

$$Wx = D(S, H) + P(H, S) + Rx$$

Wx: 「面目を脅かす度合い(FTA)」

D: 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

P: 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

Rx: 特定の文化で、ある行為が相手にかける「負担の度合い(Rank of imposition)」

すなわち、例えば、日本文化では、対話者が目上であると、社会的距離も大きいし、相手の力も大きいと考えられるだろう。その相手にかける負担の度合いは、例えば、同じ相手にでも、百円借りるときと、一千万円借りるときと違っては必ずである。Brown and Levinson は、この「社会的距離」、「話し手と聞き手の力関係」、「相手にかける負担の度合い」の三要素の関数として、「相手の面目を脅かす度合い(Wx)」が規定されるとし、この相手の面目を脅かす度合いが高ければ高いほど、より polite な戦略が必要になってくるとしている。

この Brown and Levinson の枠組みでは、linguistic politeness は、以上に述べた三要素によって規定される「相手の面目を脅かす度合い」に応じて使い分けられる話者の自発的な戦略としてとらえられており、「相手の面目を脅かす行為(FTA)」を最小限にとどめるためには、以下の五つの主要戦略があるとしている。(1) 簡潔に直接的な言語行動をとる。(2) positive politeness (3) negative politeness (4) 間接的な言語行動をとる。(5) 相手の面目を脅かす行為をしない。この主要な戦略は、さらにいくつかの、より具体的な戦略に分類されているが、ここでは、各主要戦略の主な例をあげるにとどめる。(1)の直接的な言語行動とは、緊急の場合等、簡潔に物事を述べた方が良い場合に適用される。「お気をつけになって下さいませ!」より、「気をつけて!」の方が適切な場合がある。(2)の positive politeness とは、先にあげた、相手の他者から認められたい等の積極的な面目を満たすように、相手の何かを誉めたり、共通の興味等を強調したり、相手を楽しませるような冗談を言ったりすることである。(3)の negative politeness は、相手の他者に邪魔されたくないという消極的な面目を保つために、何かを依頼する等、どうしても相手の面目を脅かす行為を行わなくてはならないときに、それを最小限にとどめるために、押しつけがましくない、相手に断る余地を与えるような、間接的な表現をすることである。「傘を貸して下さい。」より、「もし、よろしかったら、傘を貸していただけませんか?」の方が、より polite なのは、この理由による。(4)の間接的な言語行動とは、先の傘を借りたい場合に、依頼をはっきり言語で表現しないで、「今日、傘を持ってくるのを忘れてしまったんです・・・。」のように、ほのめかすにとどめる場合である。この発話は、はっきり傘を貸してくれるよう依頼しているわけではなく、この発話をどう解釈するかは、聞き手にかかっている。その意味で、聞き手の消極的な面目を脅かすことを最小限にとどめていると言える。(5)は、相手の面目を脅かすような行為はしないということである。Brown and Levinson は、この枠組みで、ほとんどの文化・言語における polite な言語表現が説明できると主張している。

3. 日本語における敬語研究成果、及び、洞察に基づく Brown and Levinson の理論の批判

この linguistic politeness を話し手の自発的な戦略としてとらえる Brown and Levinson の理論に対して、Ide (1989)、Matsumoto (1988)らは、日本語においては、「敬語」が linguistic politeness の主要な手段となるが、この敬語の使用は、ほとんど語用論的に制約されており、話者の自発的な戦略を駆使できる余地がほとんどないことをあげて、Brown and Levinson の理論を、語用論的に制約力を持つ敬語を有する言語における linguistic politeness をうまく説明していない、戦略を重視しすぎた理論だとして批判している。例えば、目上の人に対して、polite であるためには、敬語使用の

原則にのっとった言葉使いをしないわけにはいかず、Ide (1989)、井出(1986)は日本語における言語形式の選択は、自発的な戦略として行われるというよりも、むしろ、各々の文化・社会的規範に応じた「わかまえ」によって行われるものであるとしている。

4. "Politeness" という用語について

ここで、これまで "politeness" として、「丁寧さ」等の訳語を使用しなかった理由について述べたい。以上に概観してきたように、Brown and Levinson の politeness theory で扱っている "politeness" は、日本文化、日本語で、「丁寧さ」という言葉を聞いてまず連想する、敬意表現、丁寧表現等だけを扱うのではなく、もっと広い「人間関係をより円滑にし、効果的なコミュニケーションを行うための戦略」としてとらえられているということである。このことは、先にみたように、共通の知識を有することを浮きだたせ、相手を楽しませるによって円滑なコミュニケーションをはかろうと、冗談を言うことが positive politeness としてとらえられていることから明らかである。Politeness をこういうより広い概念としてとらえることは、狭義の敬語研究等の言語研究の域を出た、人間のコミュニケーション学の観点から、日本語の研究を見直す枠組みを示唆してくれていると言えよう。ただ、日本語においては、親しみを示すために、改まった敬語使用を避けて、言語形式としては丁寧度の低い常体を用いるということがあるが、これは、Brown and Levinson の理論では、positive politeness に相当する。すなわち、常体を使って、親しみを表すのは polite な行動ということになる。このような場合、日本語では、言語形式における丁寧度と語用論的な politeness が相反することになるので、まざらわしい。また、日本語では、どうしても言語形式の丁寧度(「いく」より、「いらっしゃる」の方が丁寧度が高い等)に意識が轉られやすいので、常体を用いることによって親しみを表すことを、「丁寧だ」とは言い難い。事実、Ide, et al (1992) の調査結果は、アメリカ人は、"polite" を "friendly" に近いととらえているが、日本人は「丁寧な」と「親しげな」を、ほぼ相反するものとしてとらえていることを示している。そういう意味で、politeness を「丁寧さ」と訳すのは、適当ではないと言えるだろう。この "politeness" という用語については、いわゆる politeness theory の研究が、対人コミュニケーションを進めるための戦略としてとらえられ、発展してきた経緯から、英語においても、相手に対する配慮、気配りの法則として "theory of considerateness" というとらえ方ができるのではないかという指摘(Green, 1992)や "politeness as appropriate behavior" としてとらえる動きも最近出ており(Walke and Poel, 1993)、今後、再考の余地があるところである。日本語では、既に、ポライトネスと訳されている例もあるが、本稿ではあえて "politeness" としておく。

5. 談話レベルにおける politeness 研究の必要性

日本語等の語用論的に制約力をもつ敬語体系を有する言語においては、ストラテジーを重視した Brown and Levinson の理論はそぐわないとの指摘 (Ide, 1989) を先に述べた。この指摘は、日本語の文レベル、或いは、発話レベルにおける言語形式の選択については、的を得た指摘である。すなわち、井出他 (1986) でも報告されているように、「ペンを借りる時どう言うか」というような状況設定におけるアンケート調査では、日本語の場合、アメリカ英語に比べて、相手に応じた表現の使い分けがはっきりしているという結果が示されている。すなわち、上記の状況で、例えば、指導教授に対しては、その教授とどの程度近い関係かどうかによって表現を変えるというアメリカ人の傾向に対して、日本語では、その教授との近しさは無関係ではないだろうが、その親疎の関係よりも、目上の教授であるという社会的関係によって、言語表現を使い分けられているのである。これは、語用論的に規定されていると言っても差し支えないであろう。すなわち、教授に対して「ペン貸してくれる？」とは、敬語使用の原則に従うと言えないのである。このように、文レベルにおける言語表現、形式の選択という観点から見ると、確かに、日本語においては、Brown and Levinson の理論で扱っているような、polite にするための自発的なストラテジーを駆使する余地があまりないように見える。

しかしながら、文レベルを越えた、一定のまとまりをもった談話レベルから、実際の会話を見てみると、同じ相手との同じ会話の中でも、その時の話者の心理、ある発話の素材となっている事柄等に応じて、スピーチレベルシフト (敬語の使用から不使用へ、または、その逆) が生じることが報告されているが (Ikuta, 1983; 宇佐美 1992)、この談話レベルにおけるスピーチレベルシフトは、文レベルでの相手に応じた敬語使用の原則 (目上には敬語を使用する等) だけでは、説明できないことになる。このスピーチレベルシフトの生起条件の分析結果 (宇佐美, 1992) は、相手や状況要因によって敬語使用が原則となっている会話においても、親しみを表すため等に一時的に常体を用いるということ、ほとんどの日本人母語話者が、意識的・無意識的に行っていることを示している。このスピーチレベルシフトは、談話レベルにおける一種の会話の「ストラテジー」ととらえることができる。

また、politeness を、相手との関係を円滑に保つための「言語行動」におけるストラテジーととらえるなら、文レベルにおける敬語等の言語形式の選択だけでなく、談話レベルの会話分析から明らかになる、話題の導入の仕方や頻度、あいづちのタイミングや頻度等も、politeness に影響を与える要素として考慮しなければならないと言えるだろう。例えば、相手の発話を終わらせることを催促するようなニュアンスを与えてしまう早く繰り返すあいづち (「はい、はい、～、～、～」) 等は、時と場合にもよるが、概して失礼になってしまうと言え、politeness と無関係では有り得ない。

Brown and Levinson の politeness theory は、かなり包括的なもので、興味深い点を幾つも含んでいるが、基本的に、「文レベル」、或いは、ある一つの「発話行為 (speech act)」レベルの考察の域を出ていない。彼らの理論は「文レベル」の考察にとどまる限り、

Ide (1989) の主張するように、日本語の敬語については、あまりあてはまらないと言えよう。

一方、Ide の Brown and Levinson に対する批判も、文レベルの敬語使用の原則のみに基づいており、以上にあげたスピーチレベル等、談話レベルの現象を考慮していない。Usami (1993) では、日本語のように、文レベルにおいては、語用論的に制約を受ける敬語を有する言語においてこそ、スピーチレベルシフトや話題導入の頻度等、談話レベルの要素に「ストラテジーとしての politeness」が反映されていることを示し、さらに問題は異なるものの、日本語においては、むしろ、談話レベルから politeness を見た方が、Brown and Levinson の politeness theory が適用できる部分が多くなることを示している。これらの結果を鑑みても、言語行動における politeness に関する普遍理論を確立するためには、談話レベルにおける言語行動を研究対象とすることは、必至であると言える。

6. 初対面の二者間会話の日米比較

以下のケーススタディー的会話分析では、以上に考察してきたように politeness theory の普遍理論の確立のためには、語用論的制約力を持つ敬語を有する言語と、そうでない言語を共に扱える共通の枠組みが必要であるとの考えに基づき、その一可能性としての、「談話レベルにおける politeness」を考察するために、日米の初対面の二者間会話を、主に、その開始部に焦点を当てて分析した。初対面の相手との会話の開始部は、互いにコミュニケーションがなかった関係から、会話をするることによってコミュニケーションが始まり、最低限、その会話をしている間だけにせよ、その相手となるべく良好な関係を築こうと努力する最初の段階であり、何らかのストラテジーが用いられる可能性が最も高いと予測される部分であるからである。初対面の二者間の会話においても、一定の時間が経過すると、相手の年齢、その他の要因によっては、徐々に馴染んで来て、知り合い、或いは、友人との会話に近い傾向を示すものになってしまいがちであり (宇佐美, 1993)、初対面の二者間会話の特徴が、最も顕著に表れるのは、その開始部だと思われるからである。

1) 方法

先行研究として、Brown and Levinson で politeness を規定するとされる「力関係」、「社会的距離」、「負担の度合」のうち、初対面の相手に限ることで「社会的距離」を、「大学生生活について」という話題を与えることによって「負担の度合」を一定に保つとして、女性のベースの被験者に対して、同性の「目上」「同等」「目下」に相当する対話者を割り当て、約30分の会話を行ってもらい、対話者の年齢・社会的地位に応じた言葉の使い分けを分析した (詳しい方法、手続きは、宇佐美 (1993) を参照されたい)。本稿では、同じ条件で行った、アメリカ人女性のベースの被験者と「同等」の女性の会話と、主として、先に行った日本人女性の「同等」の女性との会話の比較を中心に、日本人女性の「目上」

「目下」との会話の比較も交え、言語行動における politeness の日米比較を行った。

2) 被験者

以下に、各被験者の簡単な背景と、簡略化した実験計画をしめす。本稿では、主に、以下の表-1の会話2と4の比較を中心に行う。

3) 手続き

初対面の二者間の会話として最も自然に近い形になるよう、実験者が二人を引き合わせるまで、互いの名前等を知らせず、自己紹介の段階から録音してもらうようにした。会話終了後に、アンケートと口頭質問双方によって、相手の年齢・社会的地位が自分より上か、同じくらいか、下か等について、5段階評定で記入してもらったが、すべての被験者が、相手との関係を、実際と同じく捉えていた。

表-1 実験計画・被験者

会話	ベースの被験者	対話者	心理・社会的要因 年齢 社会的距離
1	北原 (35才大学院生)	澁谷 (55才大学講師)	+ +
2	北原 (35才大学院生)	河井 (38才大学院生)	- +
3	北原 (35才大学院生)	赤塚 (28才大学院生)	- +
4	Deborah (30才大学院生)	Candace (25才大学院生)	- +

アメリカ人被験者は互いに年齢差は少しあるとしながらも、互いに「同等」と答えていたので、「同等」の相手との会話としてとらえる。

4) 結果

(1) 会話の開始部の構造 (同等の相手との会話2と4の比較)

本実験の被験者の状況は、日米とも、大学院生であること、実験者の知り合いであること等も手伝い、実験計画で統制を試みた(初対面に限る等)以上に、均質的な条件になっていたと言えるかもしれない。すなわち、開始部の会話の流れは、日米とも、非常に似通った傾向を示した。ケーススタディーであるため、一般化は避けねばならないが、ある意味で、限られた状況下における初対面の女性同士の二者間会話の流れの典型的特性を示唆できるかもしれない。

会話の流れは、日米共、「自己紹介」「実験者といかに知り合ったか」「互いの簡単な経歴の尋ね合い」を経て、約3分経過したあたりから、相手が現在何を行っているかという話にまで至り、その後は、より深い、互いの「専門分野の話」へと進んでいく形になっていた。専門分野の話題に入ってから、日米の被験者の専門がそれぞれ異なるため、比較が難しくなるが、ここでは、会話の開始部の構造のパターンとその中で用いられている会話のストラテジーを politeness の観点から比較・分析するのが目的であるので、以下に、まず、それぞれの会話の開始部(約3分間)の会話の流れを示す。

会話2より

北原:今日は。(照れ笑い)

北原:北原と申します。

河井:あ、河井と申します。

河井:どうぞよろしく。

河井:はじめまして。

北原:こちらこそ。

河井:ええ。

河井:えー、宇佐美さんとは?

北原:ああ、あの、長いつていうか、えと、わたしは、未だにC大学の大学院生で、

河井:あー、そうなんですか。

北原:<自分の経歴とその過程で、宇佐美と知り合った経緯を話す。少し長いナレエティブ形式になる。河井はその間あいづちのみ。>

河井:こちらは、いつ頃いらしたんですか?

<中略>

北原:そちらは、長いんですか?

<中略>

北原:Linguistics ですか、ご専門は?

<中略>

北原:宇佐美さんと同じところなんですか?

<中略>

<以下、専門分野の話題に入っていく。>

会話4より

Candace: My name is Candace.

Deborah: Deborah. Nice to meet you.

Candace: Nice to meet you.

Deborah: I was going to say this is like weird but obviously you got the formalities out of the way first.

Deborah: I was ??? to ask names.

Candace: How did you meet Mayumi?

Deborah: I was in Japan last year. And I was studying with professor Imai. And
 <自分の経歴とその過程で、Mayumi と知り合った経緯を話す。少し長めのナレーティブ形式になる。>

Candace: I saw your articles about Japanese...

Deborah: Are you also studying Japanese?
 <中略>

Candace: What program are you in?

Deborah: <さらに自分の所属の大学院やボストンにいる理由等、経歴に関係したことを話す。>

Candace: What do you do in the meantime?

Deborah: Trying to write my dissertation.

Candace: Oh, year, what is it about?
 <以下、専門分野の話題に入っていく。>

以上の抜粋からもわかるように、日米の会話とも非常に似通った流れを示している。

(2) Politeness の観点から

日本語の会話2について、そのスピーチレベルを、+：尊敬・謙譲語等を含む発話、0：いわゆる丁寧体（です・ます体）を含む発話、-：普通体やくだけた言い方「わかんない」等を含む発話、の3種類に分類し、その頻度を調べたところ、北原、河井双方とも、約60%の発話が0レベル、いわゆる丁寧体となっており、初対面の会話では、通常、丁寧体以上のスピーチレベルが基本となるといういわゆる文レベルにおける敬語使用の原則が守られていることが示された（宇佐美、1993b）が、筆者は、敬語を有する言語においては、敬語使用の原則を守ることが、既に、相手の消極的面目を守る、すなわち、negative politeness として働いていると解釈する。これは、Ide (1989) が主張する、話用論的制約を受ける敬語使用の部分である。しかし、実際には、日本語にも、スピーチレベルシフト等、自発的なストラテジーを用いる余地があることも示し、+、或いは、0レベルから-レベルへのシフトは、日本語における positive politeness のストラテジーとしてとらえられるとした（宇佐美、1992a）。すなわち、敬語使用の原則に沿った言語使用によって、最低限の negative politeness を保った上で、スピーチレベルシフト等の談話レベルの要素、非言語形式要素によって、巧みに相手の積極的面目を

保つように働きかけているのである。この positive politeness としての-レベルへのシフトは、会話1（目上）と会話3（目下）と比較して、この会話2（同等）において最も頻度が高かった。紙数も尽きてきたので、ここでは、以下に、positive politeness として用いられていた三つの主なストラテジー（無意識も含む）を列挙するとどめるが、それは、①笑い、②冗談を言う、③共通の話題、興味を探るであった。また、この三つは今回のアメリカ側のデータにも共通する点であった。ここで改めて気づくのは、①の笑いを除き、これらが Brown and Levinson の positive politeness のストラテジーとして、あげられているということである。すなわち、談話レベルにおける politeness を見ることによって、少なくとも、日米の politeness を共通の枠組みでとらえることが可能になるということである。

7. おわりに

以上、politeness の普遍理論確立のためには、敬語を有する言語とそうでない言語の双方を扱うことができる共通の枠組みが必要であること、そのためには、談話レベルにおいて politeness をとらえることが必須であることを、先行研究の概観とケーススタディー的会話分析の日米比較から、示唆しようとした。本研究で扱ったケーススタディーの細かい結果を、即座に一般化することはできないが、本稿の目的は、むしろ、politeness の個々のストラテジーを列挙することではなく、politeness 研究における新しい視点を提出し、普遍理論の修正・確立のための方向性を示唆することにあつた。まだ、模索の段階ではあるので、今後は、さらに、日本語の談話レベルにおいて、どのようなストラテジーが用いられているかを明らかにしていき、敬語使用の原則的制約と自発的ストラテジーの使用との関係、また、これらの言語行動が Brown and Levinson の politeness theory の修正、或いは、普遍理論の確立のための試みに、いかに関連づけられるかを探っていく必要があると言える。

引用文献

- Brown, R. and Gilman, A. (1960). The pronoun of power and solidarity. In T.A. Sebeok (Ed.), *Style in Language*. Cambridge: M.I.T. Press and John Wiley & Sons, Inc. 253-276.
- Brown, P. and Levinson, S. (1978). Universals in language usage: politeness phenomena. In Esther N. Goody, ed. *Questions and Politeness*. Cambridge University Press, 56-311.
- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Green, G. (1992). The universality of Gricean accounts of politeness. Lecture at the 1st Conference of Pragmatics Association of Japan. Tokyo.
- Ide, S. (1989). Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8, 223-248.
- 井出祥子他、(1986)、『日本人とアメリカ人の敬語行動』、南雲堂。
- Ide, S., Hill, B., Carnes, Y.M., Ogino, T., and Kawasaki, A. (1992). The concept of politeness: an empirical study of American English and Japanese. In Watts, R.J. et al. (eds.) *Politeness in language: studies in its history, theory and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Ikuta, S. (1983). Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences, Vol. 5, No. 1*. 37-53.
- Lakoff, Robin. (1973). The logic of politeness: or minding your P's and Q's. *CLS* 9. 292-305.
- Leech, G. (1983). *Principles of pragmatics*. New York: Longman. 『語用論』池上、河上訳、紀伊国屋。
- Matsumoto, Y. (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12, 403-426.
- 宇佐美まゆみ (1992). 「談話レベルにおける敬語使用の分析: スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『平成4年度日本語教育学会秋季大会予稿集』19-24頁。
- (1993). 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー: 話者間の力関係による相違-日本語の場合」、『ヒューマン・コミュニケーション研究』、第21号: 25-39.
- (1993b). 「初対面の相手との会話における会話のストラテジーの分析(1) ケーススタディー: 相手に応じた使い分けという観点から」、『学苑』、昭和女子大学8・9月合併号掲載予定。

- Usami, M. (1993). Politeness and Japanese conversational strategies: implications for the teaching of Japanese. Qualifying Paper submitted to Harvard University, Graduate School of Education.
- Walle, L.V. and Poel, K.V. (1993). Where East meets West and the classical world meets contemporary society: Politeness as appropriate behavior. Paper to be read at the 4th International Pragmatics Conference, Kobe, Japan.

宇佐美まゆみ(1994)「言語行動における“politenessの日米比較”」
『スピーチ・コミュニケーション教育』7、日本コミュニケーション学会: 30-41. 12頁. 1994年.